

原著<論文>

ホワイトヘッドの命題論と多元的宇宙
——「一」にして「多」なる世界の現実態と可能性——

村田 康常*1

宇宙はかつて成ったのではなく、不断に成りつ
つあるものなのだ。それは疑いもなく新しい世
界を付け加えながらはてしなく成長している。

(H. L. Bergson, *L'évolution Créatrice*)

はじめに——「多」と「一」の形而上学

現実世界を新しさへの創造的前進のプロセスと見るホワイトヘッドの形而上学的宇宙論では、創造性との関わりで偶然性や可能性が重要な主題となる。本論文では、ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論体系において究極的なものの範疇を構成する「多」と「一」と「創造性」を中心的な主題とする思弁を辿って、偶然性や自由と必然、可能性と現実態などの諸様相によって描き出される宇宙像を描き出すことを試みる¹⁾。この議論は、「可能世界論と多元的宇宙論」とでも呼びうるようなテーマをめぐる、「命題(propositions)」あるいは「理論(theories)」に関するホワイトヘッド独自の形而上学をかなり自由に解釈していくことになるだろう。

この現実世界を多と見るのか一と見るのか。ホワイトヘッドの思弁哲学は、西洋形而上学の屋台骨ともいえるこの伝統的な論題を現代に継承する形而上学的宇宙論の試みである。ホワイトヘッドは、明示的には多様性を強調する形而上学的な立場に立つが、その著作は、多元論と一元論とを揺れ動く思弁哲学の歴史を体現するように、多元的宇宙の形而上学だと断言することをためらわせるような言葉を含んでいる。たとえば、「〈神〉が一であり〈世界〉が多であるというのは、〈世界〉が一であり〈神〉が多であるのと同様に真である」(PR. 348)²⁾。

ホワイトヘッドの描く世界は、多かと思えば一、一かと思えば多、ひるがえるように流れて、私たち読者の視点が定まらない。彼の宇宙論の良く言えば全包括的な十全性、悪くいえば何でもありの捉えどころのなさの理由は、彼の思索が、「現実世界」の現実性(actuality)を、単なる「還元できない頑固な事実」の巨大な塊としてだけでなく、それと限定した途端に流動の中に消滅していく

*1 名古屋柳城女子大学

ような諸出来事の生成の動的なプロセスとして理解しようとする探求だったからだと思われる。さらに言えば、ホワイトヘッドが探求したこの現実世界の多様性は、実現された諸々の出来事だけでなく、実現されたことのない諸可能性をも蔵する、無際限の多様性だったように思われる。したがって、その思索を体系化する際、ホワイトヘッドは、ある困難に二方面からぶつかることになる。一方で彼は、単なる頑固な事実性のみを現実とするような狭い見方に抗して、諸可能性を蔵した現実世界の豊饒な多様性を確保するために、現実世界と可能世界の単純な線引きを無効化するような説得的な論理を構築しなければならない。しかし他方で彼は、そのために彼の宇宙論体系が描く現実世界が実現された出来事も実現されなかった可能性も混然とした「何でもあり」の世界になってしまうことを避けて、限定された現実性と無際限な可能性のあいだに「コントラスト」を示すような論理を目ざさなければならない。

ある一つの出来事、たとえば「今、ここ」での私が現にこのようなものとして生成するためには、私の存在に直接・間接に関与するすべての事態がそのようなものとして成立していなければならない。そして、それだけでなく、一つの出来事がまさに一であるということ、すなわち、現にこのように成立している諸事態やその直中に生成する「今、ここ」での私の具体的に限定された事実性がいかに個別的で唯一的であるかということは、諸事態が別様にもあり得たし、したがって「今、ここ」のこの事態も別様にあり得たという可能性とある仕方で対比させることによって示される。この対比（コントラスト）を論理化することによってはじめて、一つの出来事の生成は新しい価値の実現であるというホワイトヘッドの有機体の哲学の基本的な観点が体系的に示されることになる。実現された諸事態とのコントラストだけでなく、このコントラストが実現されなかった諸可能性とのコントラストをも含意することによって、ある一つの出来事の生起においていかなる価値が実現されるのかを語るができる。

ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論では、多が一となり一つ増し加えられていくという創造的世界の動的な多様性が、単に現実世界に実現する諸要素の多様性としてのみ理解されているだけではない。現実世界の多様性に、可能世界と呼びうるようなさらなる多様性が重ねられることで新しい理想が着想され、その実現に向けた生成の営みのうちで世界が創造的に前進する。つまり、現実世界と可能世界との重ね合わせが「今、ここ」での生成のプロセスにおいて生じ、そのことを通して多様性がさらに豊饒になるとともに、真に新しい一が生成するのである。現実世界の諸要素と可能世界の諸要素とが重ね合わされ結合されて一つの理想的な認識が成立していくという事態を論究したのが、ホワイトヘッドの「命題(propositions)」あるいは「理論(theories)」に関する形而上学的議論である。

1. 「創造性」——多にして一なる世界の究極の形而上学的原理

後期ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論は、「リアリティはプロセスである」(SMW.72)という洞察を出発点として、創造的に前進しつつそのつどの調和を実現する世界のあり方を丹念に論究していく。リアリティがプロセスであることを諸範疇の図式化によって体系的に示した「説明の範疇」の第一に挙げられているのが、「現実世界はプロセスであり、プロセスとは現実的存在(actual entities)の生成であるということ」(PR.22)である。

彼はこの「リアリティはプロセスである」という根本的な洞察を飽くことなく、さまざまな理論と洞察において提示し体系化する。しかし、体系的思索の常として、それらの諸議論からなる体系全体を一挙に見通す展望台のような論点がある。つまり、彼の論理体系を読み解く鍵は、いくつかのポイントに絞ることができる。そのポイントのひとつが、「多」と「一」というコントラストをなす対概念である。そして、このコントラストを「実在はプロセスである」という洞察の中で駆動させているホワイトヘッド形而上学の究極的な原理が、「創造性」である。

「創造性」こそ、この現実世界を思弁するための思考の範疇における究極のものである。言い換えると、「多」でもあり「一」でもある世界をプロセスとして整合的に描き出すには、「多」と「一」だけでは足りない。それらは、ベルクソンが、生命の活動を語るにはふさわしからぬスタティックで空間的な概念だと述べていたものなのだ。

われわれの思考の範疇、たとえば一とか、多とか、機械的因果性とか、知的合目的性などは、どれひとつとして、生命の事柄にはぴったりとあてはまりはしない。〔中略〕生命は一なのか、多なのか、そんなことを誰が言えようか。³⁾

ベルクソンが示唆したように、生命は、「一」であるかと思えば「多」、「多」であるかと思えば「一」、ひらりひらりと身をひるがえしながら、一切を巻き込んで滔々と流れていく。そのひるがえり、さざめき流れていく大奔流こそ、この生命の宇宙の創造的プロセスである。生命の世界のアクチュアリティは、「多」と「一」だけでは汲み尽くせない。ベルクソンのこの洞察は、ホワイトヘッドも共有している。ベルクソンは、しなやかにひるがえる生命の世界の躍動を「生命のエラン」と呼んだが、ホワイトヘッドはそれを「創造性」と呼ぶ。世界は「多」でもあり「一」でもあって、その両者のコントラストが世界の大きな流れをなすところに、「創造性」という究極的なものの働きを見るのが、「実在はプロセスである」というホワイトヘッドの宇宙論である。そこに描かれる世界のめく

るめく流れとさざめきは、私たちが意識している領域からはるかにみ出す縁量としてどこまでも広がりながら、ある気配として私たちを取り巻き、圧倒的な情動として巻き込み、衝動的な意欲として私たちを見舞う。

「多」と「一」は、こうして、「情緒」と「意識」というコントラストとも交錯する。だからこそ、「多」と「一」のコントラストは、その動的で情緒的なひるがえりにおいて、つまり機械論的な因果性によってではなく「創造性」に基づいて捉えなおされなければならない。

「創造性」、「多」、「一」の三者は、ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論体系において「究極的なものの範疇」を構成している(PR.21)。「創造性」は、「普遍的なもののうちの普遍的なもの」(ibid.)であり、しかもそれをホワイトヘッドは「新しさの原理(the principle of novelty)」(ibid.)と呼ぶ。つまり彼は、恒常不変の存在を思索する伝統的形而上学の転換を図っている。彼が目指すのは、新しさへと創造的に前進する世界を思索する形而上学体系である。「リアリティはプロセスである」という最初の直観に基づいて、存在論を「創造性」という究極的なものの範疇に基づいて構想し、多でもあり一でもある世界の論理を新たに定式化するということが、彼の思弁哲学の野心的で冒険的な試みである。「創造性」「多」「一」の存在論は、まず、次のように定式化される。

多は一となり、一つ増し加えられる。(The many become one, and are increased by one.)(PR.21)

多が一となり、その一が多に増し加えられていく。この出来事のうちにこそ、「創造性」の具体的な躍動がある。その躍動のなかで生起する個々の出来事のうちに多なるものが共に成長しつつ一つの個性性を達成し、そのようにして生成した一なるものが多なる世界に新しい一点を加えていくということがホワイトヘッドの「プロセス」の形而上学である。

形而上学的原理のこのような定式化からはじまるホワイトヘッドの思弁の道は、實在の「最終的解釈」を行う『過程と實在』の最終部において、〈神〉と〈世界〉とのコントラストとして取り上げられる「多」と「一」の論理へと至る。ホワイトヘッドはこう言っていた。

〈神〉が一であり〈世界〉が多であるというのは、〈世界〉が一であり〈神〉が多であるのと同様に真である。(It is as true to say that God is one and the World many, as that the World is one and God many.)(PR.348)

ここでは、〈神〉と〈世界〉とのコントラストのなかで、「多」と「一」という形而上学の究極的なものの範疇に関する最終的な思弁が、逆説的な言い回しで定式化されている。ホワイトヘッドはここでは、「多」と「一」が生成と創造的前進のプロセスにおいてコントラストを描くさまを定式化するのに、「創造性」という範疇を明示的には用いていない。しかし、この逆説的な定式化も「創造性」という形而上学の究極的な原理を前提としている。

ホワイトヘッドの宇宙論では、個々の経験の契機が、〈世界〉の多様性を一つに統合することで固有の価値を具体的かつ特殊な仕方を実現する。一方、多なる〈世界〉は、個々の経験において実現した個別的価値を受け取り、その多様性を増していく。〈神〉は、他のすべての現実的諸存在にとって、「感じのための誘因(lure)」であり、「欲求のための永遠の衝動」である(PR. 344)。それぞれの現実的存在をそれ自身へと生成するよう促し誘う神の誘因は、それぞれの現実的存在に、その生成の主目的となっていくような最初の目的を示して創造性の活動を具体化する働きである。「世界において、それ自身の制約された立脚点から生じてくるそれぞれの創造的働きに対しての神の特殊な関わりは、神をしてそれぞれの主目的の最初の相をうち立てる最初の〈欲求の対象〉に構成する。」(PR. 344)

〈神〉を除く時間的な現実的諸存在は現実的諸契機(actual occasions)とも呼ばれる。それらは〈神〉の「特殊な関わり」によってそれに固有の目的を示されてそれ自身を創造していく自己創造的な出来事だが、それらは受動的な意味での被造物ではなく、創造の衝動を吹き込まれてその方向を示されつつ、みずから生成していく。生成とはこのように、促され動機づけられつつ自己を創造していく活動である。ホワイトヘッドは、「超越的な〈創造者〉」を前提としないという意味で内在的な生成の観点に立ち、自分が用いる「創造性」という語は「内在的創造性」あるいは「自己創造性」を含意すると示唆している(AI. 236)⁴⁾。

生成とはまた、現実世界の「多」なるものがその自己創造活動のための所与として、相まって新しい「一」なるものへと共に成長していく(growing together)ということ、つまり「合生(concrescence)」でもある(AI. 236)。「創造性」というもっとも普遍的で抽象的な働きは、〈神〉の特殊な関わりによる誘因と、〈世界〉の多なる他の現実的諸存在の所与性によって具体化されて、一つの現実的存在の生成に目的論的かつ因果論的に働きかける。しかし、それは創造者による制作活動ではなく、生成するものの自己実現である。〈神〉によってそのつど立てられる最初の目的は、諸可能性の制限ではあるが、自由の剥奪ではない。最初の目的から生成の主目的が定められていくが、それは機械論的決定論の全体設計図を個々の出来事に振り分けた個別設計図といったたぐいのものではない。むしろ、最初の目的は、こちらへと誘い、彼方へと促す誘因であり衝動であって、主目的は、

それを受けて生成していく主体の意欲がそこへと向かって多なる活動性を統合していくめあてである。そこには未決定があり、限定性ととも制約された自由がある。「こうして、直接的な契機は、それ自身の本質である自発性に基づいて、主体的形式を総合するための欠落している決定(the missing determination)を補わなければならない。」(AI. 255)〈神〉によるとされる最初の目的の定立が誘いであり促しであって、これを受けて立てられていく主体的目的が「欠落した決定」であるがゆえに、多が一となる世界は、必然性が支配する目的論的決定論の世界ではなく、創造性による偶発的出来事が満ちた世界となる⁵⁾。

有機体の哲学は、「創造性」の具体的な働きを超越的な創造者と内在的で受動的な被造物との二元論的な構図において捉えるのではなく、生成／消滅の自発的ダイナミズムとして捉える。このように創造性の具体化を生成と捉えるところに、この哲学が「多」にして「一」の動的な多元論を提唱する立脚点がある。この観点から、私たちの直接経験する世界は、「創造性」によって賦活された、多なるものが一なるものを目指して共に成長していく自己実現のプロセスとして解明されるのである。

一方、生成した「一」は、それがそこから由来した多なる世界を構成する一要素として、この世界の多様性に増し加えられていく。それは、量的に一つ増えるというだけのことではなく、多なる世界全体が少しだけだが丸ごと刷新されることである。これが世界の新しさへの創造的前進という学説であり、ホワイトヘッド哲学がその全体系を通じて提示しようとするものである。各々の現実的存在は生成し、その生成した個別的自己を「多」なる世界へ増し加えることで、世界の創造的前進に参与する。

私たち自身もまた、それぞれが、一瞬一瞬、「多」と「一」との創造的なコントラストの直中で、そのひるがえりさざめく創造的な前進の焦点として生起していくひとつひとつの生成の出来事である。つまり、多から生成する一は、創造的に前進する世界の、その創造の焦点として生成する⁶⁾。

2. ざわめく世界

多なる世界を表現する一としての個は、この世界をどのように経験しているのだろうか⁷⁾。ホワイトヘッドは端的に、「一方では、一が多になり、他方では、多が一になる」(PR. 167)と言う。「多」と「一」とのひるがえりの中で、「創造性」は〈神〉から、「多」は所与の〈世界〉から、新たに生成する「一」へと内在する。しかし、創造の具体的活動は「超越的〈創造者〉」が行うのではなく、そのつどの内在的な多なる現実的諸存在が新たな一なる現実的存在の生成に向けて行う。現実的存在は、〈神〉の誘いと促しを通して内在する「創造性」の衝動を受け、〈世界〉の多なる所与性にお

いて具体化された「創造性」を継承して、それ自身を創造していく。実現された個は、その特殊な完成による満足の感じを創造性に刻印して、主体的な直接性を失って世界の多様性を構成する一つの要素となっていく。

このようにして「多」から「一」へ、「一」から「多」へと律動するさざめきに満ちた〈世界〉と、その焦点としてのそのつどの「今、ここでの私」のアクチュアルな活動性を通じて、現実の世界において多が一になり一つずつ増し加えられていく。しかし、このような多が一になり一が多に加えられるっていくこの現実世界とは、そこに生成するそのつどの「今、ここでの私」にとって、いかなる世界なのか。

ホワイトヘッドは、直接経験において一挙に成立している事態をいくつかの段階ないしは相へと分析して、それらを持続する瞬間における一連のプロセスとして記述する。すなわち彼は、多なる所与から、「今、ここでの私」という個別的な一つの主体性が生成していくプロセスを、諸相へと分析する。その分析を体系化したものが、現実態が成立するプロセスを発生論的に分析した「把握理論」(『過程と実在』第三部)である。

もちろん、直接経験の世界を分析的に解明する思弁によって提示されるのは、完全な解明ではない。この思弁が直面するのは、「自然の複雑さは、汲み尽くすことができない(inexhaustible)」(PR.106)という事態であり、思弁的理性は、世界の無際限の多様性と複雑さを不十分な論理によって定式化した暫定的な構図を示すことしかできない。

世界の多様性をホワイトヘッドは「離接的(選言的)多様性(disjunctive diversity)」(PR. 21)と表現するが、それは個々の独立した要素が整然と配置され秩序だった世界としてまず経験されるのではない。私たちが直接経験する世界の原初相は、全体として、ざわめき、うねり、ごった返して、その一つ一つの要素が判然とせず、それらをそれぞれに名指すことのできない渾然とした何かである。直接経験の事実を考究の出立点とするホワイトヘッド⁸⁾は、ジェイムズの「ざわめく(buzzing)」という言い回しを借りて、次のように言う⁹⁾。「我々はともにある被造物たちの民主主義の直中で、ざわめく世界(a buzzing world)のうちに自らを見出す。」(PR 50)この世界は、自然であっても社会であっても、直接経験の原初相においては雑然としたものとして経験される。「社会的な構成物は、諸特徴のごった返し(a welter of characteristics))を例証している。いかなる事実も、単にかくかくしかじかのもの(merely such-and-such)ではない。」(AI. 234)私たちの人間的経験は、その漠然とした巨大なざわめきやごった返しから、意識的主体の統一的で秩序づけられた「これこれしかじかの」経験が生成していくプロセスの中にある。渾然としてそれと名指しすることもできない多なるごった返しが、明晰判明な意識的知覚へと生成していくプロセスの解明こそ、多が一にな

るプロセスの知覚論的な描写である。

ホワイトヘッドの形而上学において、世界の多様性は、経験の原初相において渾然としたごった返しの中で塊状の広がりとして感じられ、その輪郭は半影のなかにどこまでも遠ざかっていくような、漠たる何かである。しかし、それは彼方から此方へと迫りくる何かであり、彼方のごった返しから此方の認識が生まれるプロセスである。ホワイトヘッドの言葉で言えば、「感じはベクトルである。というのも、それはそこにあるものを感じ、それをここにあるものへと転換するからである」(PR. 87)。このベクトルをもった「感じ」、つまり「抱握」において、彼方の多が此方の一へと統合されていく。

現実世界の多なる要素を「今、ここ」に現前するものとして感じつつ、新たな価値を実現する営みが、「多」の「一」への統合としての現実的存在の生成のプロセスである。このプロセスを分析するホワイトヘッドの議論のうちには、多元的世界に関する2つの側面からのアプローチを認めることができる。

1つは、多を一へと統合しつつ新しさを実現する合生のプロセスを論じる「抱握」の理論、特に、現実世界の多なる要素を統一的な認識へと統合して一つの事態として認識する「命題的感じ」の生起に関する議論である。その議論のベースになるのは、現実世界を、多が一へと統合され、またその新しい一が多に増し加えられるというプロセスによって、新しさへと創造的に前進する大きなプロセスと理解する視座である。この統合のプロセスを知覚が成立するプロセス（あるいは知覚する主体が生成するプロセス）として解明する議論の中で、命題論が論じられる¹⁰⁾。

もう1つのアプローチは、この命題論において示唆される、実現されなかったものたちの多様な可能性を背景にした、現実世界の偶然性に関する考察である。この考察は、ホワイトヘッドが命題論を導入する箇所、現実世界では厳密な意味では実現されなかった可能性を想像的に抱懐する心的極の働きを論じるかたちで、ごく簡略に言及しているものである。しかし、多様な可能性を想像的に抱懐する多くの精神的な活動を示唆することで、ホワイトヘッドは、直接経験の世界の多元性を示している。

これら2つのアプローチは、この論文において議論するために便宜的に設けた区別である。それらは多元性ないしは多様性に関する異なる事態を示すのではなく、直接経験の現実世界の多様性を異なった視角から立体的に描き出しており、直接経験の世界の創造性を指示している。次節では、この2つのアプローチによって、知覚論としての「命題論」をかなり自由に読み解きながら¹¹⁾、世界の多様性についてホワイトヘッドが示すところを見てみる。

3. 「多」をめぐる命題論への2つのアプローチ・その1——頑固な事実と、常識的な意味での命題

一にして多なる世界についてのホワイトヘッドの思弁へのアプローチを本論文で便宜的に2つに区別するのは、世界の多様性という観念が、現実態において実現するものの離接的多様性だけでなく、ライプニッツが無数の可能世界というアイディアによって示唆したように、潜勢態において可能であるものの、さらに豊饒な多様性を含意するからである。

ホワイトヘッドはウィリアム・ジェイムズが弟ヘンリーに宛てた手紙の言葉を用いて、直接に経験される現実世界には「還元しがたい頑固な事実」(SMW. 3)という側面があると指摘する。この「頑固さ」は、所与の現実世界の多なる諸要素が、過ぎ去って二度と帰らない定着した諸事物の結合体(nexus)という「公的な事態」であることを意味する。この「頑固な事実として考察された現実世界の所与性」(PR. 129)は、個々の主体(すなわち現実的存在)が現実世界を認識しつつその直中に生起する(すなわち抱握する)ための「機会(opportunity)」を提供するとともに、個々の現実的存在がこの世界をいかに認識するか(抱握するか)という「私的な事態」を制約する限定性である。現実世界は、それを経験する私たちの経験の原初相においてはざわめきに満ちたごった返したが、抱握プロセスとしての経験のなかでこのごった返しの頑固な事実から諸要素が取捨選択され強調されて、それらの選択・協調された諸要素が解釈された事実を構成して意識的経験の内容となる。たとえば、この現実世界は、クレオパトラの鼻が低くはなく、カエサルが武装解除せずにルビコン河を渡り、ワーテルローの戦いでナポレオンが敗れた等々の、頑固な諸事実の結合体からなる公的事態として、私たちの直接経験に与えられている。

直接に経験する現実の世界は離接的な多様性のうちにある様々な要素がそれぞれに構成した複合的な結合体からなるが、それは、無際限に多様な可能性を各々の主体が無制約的に実現している世界ではなく、別様で有り得たかもしれなかったが、まさにそのようにしか実現しなかった「社会的諸結合体の塊状の再生」(ibid.)が諸経験を制約する基盤となるような世界である。「今、ここ」での現実世界の経験は、無制約的に新しいものを創造する活動性ではなく、むしろ「常識にとっては(for common sense)」(ibid.)、頑固な諸事実の塊状の再生という強力な制約を受けているとホワイトヘッドは言う。「常識」とは、このとき、実現された諸事実の結合体からなる公的事態を同一物の反復として再生していくような経験の主體的形式である。そのような主體的形式にとっては、この現実の世界は、たとえばワーテルローでナポレオンが敗北したという歴史的世界の諸帰結を受容した主体とそうでなかった世界に生起した主体とが直接に出会うという意味での多元的なものの邂逅が現実が生じるような世界ではない。「常識」が前提とする世界は、多なる要素が塊状の結合体をなす頑固な事実として与えられているような世界であり、多なる要素の統合のもろもろの可能的な形式が経

験の諸客体によってあらかじめ限定されていて、そのつどの経験はその再生となるような世界である。それは、定着した諸事実の結合体が因果的必然性をもって現在の諸事実の公的事態に帰結するような、「頑固な事実という究極的な作用者」(PR. 128)が支配する必然的世界である。

言語的に定式化される「命題」は、そのとき、現実世界の所与性を受けて、せいぜい「彼女は同時代の平均よりも鼻が高かった」とか「辺境軍司令官が軍隊を率いて渡河する」とか「彼は近衛隊にラ・ベル・アリアンス協の陣を離れるよう命じた」とか、はたまた「この花は赤い」だの「この壁は灰色である」だのといった言語的措定として生成する。言明化される命題や定式化される理論は、事実だけに基づくのではなく、「徹頭徹理論的な解釈で貫かれている」(AI. 3)とホワイトヘッドは指摘して、次のように述べている。

視覚による直接の観察が関わっているのは、動いている色のついた形——「疑わしい形」の視覚的な像(vision)である。聴覚による直接の観察が関わるのは、音の聴覚的な像(auditions)である。しかし、そういう形や雑音と同時的な観察者、たとえば外国の宮廷に駐在するある公使は、いわゆる「むきだしの」事実を解釈して「自分は大臣に会見した。大臣はかなり感情をあらわにして、非常に明確に、さしせまった危機に対処しようとする施策を説明した」などと報告する。このように、同時的な証拠はそれと同時的な解釈であって、むきだしのままで感覚されるこれらのものとは別の与件を想定することを含んでいる。(AI. 3-4)

大臣との会見についての報告から花の色の赤さに関する言明まで、あるいはルビコン河を渡るカエサルもクレオパトラの美しい容貌もワーテルローでのナポレオンの敗戦も含めて、多様な言語的な措定は、歴史的・社会的・文化的な文脈において選択された材料が解釈され関連づけられ評価され物語的な意味を付与されることによって産出される多様な表現のなかの一つの形態、一つの段階を切り取ったものであり、あるパースペクティヴからある時点で感じられ判断された頑固な事実の限定性を再生産する定式化の生起である。言い換えると、現実世界の意識的経験は、「諸特徴のごった返し」から「単にかくかくしかじかのもの」(AI. 234)という認識が成立していくプロセスであり、この「かくかくしかじか」のそのつどの定式化の生起が、ここで便宜的に第一のアプローチと呼んだ観点から見られた常識的な「命題」の生起である。しかし、この常識的な反復の再生もまた、そもそも何らかの社会性を前提としている「社会的諸結合体の塊状の再生」(PR. 129)であるかぎり、ある特定の社会の「常識」として定着している定式化の枠組みによって構造化された認識であり、別の「常識」においては別様の構造化がなされ、別のパースペクティヴからは別様に語られる可能

性が常にあることは、留意しておく必要がある。地中海世界以外の人の目から見たら、クレオパトラの鼻は異様な形状として別様に形容されたかもしれないのである。

5. 「多」をめぐる命題論への2つのアプローチ・その2——心的な働きの高まり

ホワイトヘッドは、「命題」を言語的な定式だけに限定しない。より正確に言えば、言語は命題を十全に表現するものだと理解してしまったところに、近代的な思考と学問の誤りと限界があると彼は考えていた(PR. xiii)。直接経験の事実としての現実世界は、常識にとっては、一定の社会的諸結合体がある時代のある時期になじんだ反復的再生の形式に即して定式化された判断や信念によって認識される。ホワイトヘッドはそれを認めるが、「命題」とは判断や信念だけではなく、心的な働きが高まって「新しさが閃く」ところに働く「感じのための誘因」だということを強調し(PR. 184-185)、また、「それら〔命題〕は、単なる与件に縛りつけられない感じ(feeling which is not tied down to mere datum)が生まれるための源泉をなしている」(PR. 186)と述べている。ここで、ホワイトヘッドの神が、新しいものの生成を誘う最初の目的を立てると言っていたことを想起したい。そのつどの生成の瞬間において、神によって立てられた最初の目的は、現実世界の頑固な事実の所与性によって条件づけられることで、原初の漠たる衝動あるいは誘引からより具体的に条件づけられた目的へとその輪郭を明確にさせていく。それは、現実世界の諸与件によって条件づけられながらも、単なる与件に縛りつけられずに新しさが閃くような心的な働きに対する「感じのための誘因」である。例えば人間的経験において、それは、心的に抱懐された目的や理想、憧憬や願望となるだろう。そのように条件づけられ具体化された「感じのための誘因」が、「命題」の、所与のもの常識的再生産とは異なるもう一つの特徴である。単なる与件に縛りつけられない心的な働きとしての「命題」を論じるために、ホワイトヘッドは、定着した諸事実の結合体が所与として与えられるという「公的事態」に対して、それらをそのつどの経験の主体がいかにか抱握するかという主体的形式である「私的事態」を対置する。ここでは、これを命題論の第二のアプローチと呼ぶことにする。

つまり、現実世界の「多」なる要素が「一」なる経験において統合されるというプロセスを、ホワイトヘッドは公的事態の頑固な所与性と私的事態の自由な自発的生成という2つの側面から描き出しているのである。ホワイトヘッド哲学が掲げる「有機体」という観念は、この両側面をもつ世界のプロセスを示している。

経験のうちに多なる諸事実があらかじめ定着した結合体として与えられているという「公的事態」の所与性は、当該社会の「常識」に沿って特定の諸要素の連合を強制的に選択させる形式に即して反復的に再生されたものであり、これが、「有機体」という観念がもつ「巨視的な意味」をなす。

この側面からみたとき、現実世界における「多」は、すでに塊状に結合された頑固な事実として一団となって与えられて、その常識的で公的な反復的再生を迫る。そのつどの「今、ここ」での経験は、このようにして特定の所与の世界の社会的な常識的枠組みのうちで内的に決定されている。

これに対して、ホワイトヘッドは「私的な事態」を「有機体」という言葉が含意する「微視的な意味」と呼び、そこでは「経験の個体的統一性を実現するプロセスとして考察された現実的契機の形相的構造」(ibid.)が問題となるとしている。この形相的構造は、私的な事態であり、あらかじめ結合された頑固な諸事実の再生的な反復とは別の原理による、多の一への統合において新しさを実現するプロセスである。私たちが各々の歴史的・社会的な文脈の中でそのつどのパースペクティブから直接の経験を解釈し意味づけ理解し物語るといった営みも、高度に文明化された有機体の「私的な事態」において生成される「微視的な意味」だといえるだろう。

そこで、必然的な反復を迫ってくるような単なる与件に縛りつけられない有機体の「新しさの機関」として強調されるのが、経験の主体である現実的契機の心的極の働きである。そして、「頑固な事実」の反復性に対して、それらを有りえたかもしれないものとのコントラストにおいて意味づけることで新しい価値を実現していくような心的極の働き介入によって成立するのが「命題的な感じ」である。

公的事態の圧倒的な限定性に対して、私的事態の自由な自己実現がいかんして可能なのかを説明するために、ホワイトヘッドは、別様に有りえたかもしれない可能性と、現にこのようではなかったかもしれないという偶然性を背景に保持しつつ心的な働きの内的強度が高まった現実態が生成していくことを示す。そして、この所与性と限定性の背景にある可能性を現実態のうちで明確化する働きが、新しさの機関としての心的極の働き(概念的把握)と、頑固な事実の所与性を感じる働きとが混成的に統合されていくところに生じる「命題的な感じ」である。

「把握」の理論が扱うこうした「形相的構造」あるいは「経験の個体的統一性を実現するプロセス」は、いくつかの基本的な様相をもった命題の感じが成立するプロセスである。このプロセスは、それぞれの様相に応じていくつかの相ないしは段階に分析できるだろう。それは、まず、(1)渾然とした初期の多様性のごった返しが、(2)その塊状の多様性が別様には存在しえないという必然性(necessarity)を帯びた頑固な諸事実の結合体として与えられ、(3)他の可能性を排除されるという限定を受けつつ最初の目的を抱懐することで具体的な主体的目的が立てられ、(4)現にこのように有るという現実態(actuality)のかくかくしかじかのあり方へと個体的統一性を実現される、というプロセスである。

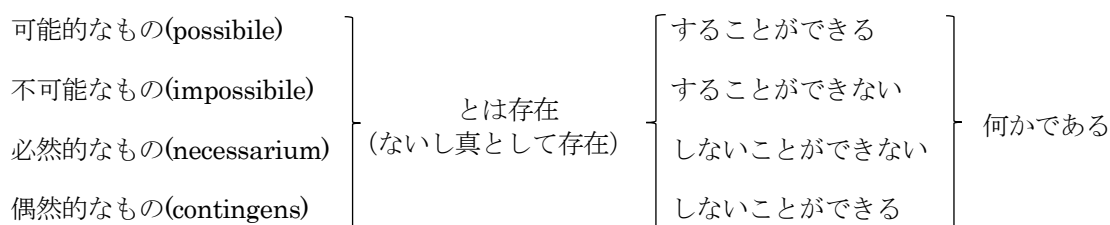
しかし、ホワイトヘッドが意図したのは、直接経験の世界の汲み尽くすことのできない複雑さと

多様性を、暫定的ではあっても当座の説得力と整合性をもった論理体系において表現することである。それは、必然性による決定論を排した創造性の形而上学的宇宙論として提示される。頑固な事実のもつ所与性が事実的な条件として生成を限定するのに対して、心的な働きの高まりは、別様に有りえたかもしれないという可能性(possibility)を背景にして、このようには有りえなかったかもしれないという偶然性(contingency)を保持しつつ、そうした可能的な「命題」を偶然的世界における自己の現実的な活動を導く誘因として感じる。言い換えると、精神は、常識が再生産したかくかくしかじかのあり方とは別様にもありえる世界を想像しつつ、現実の世界の事実的な所与性を超えていく。しかし、ここに精神の自由があると結論することは、まだできない。別様の世界があり得たとしても、その世界もまた、理性によっては汲み尽くすことができない複雑さや背景を蔵しているだろう。心的な働きとしての精神は特定の所与性による公的事態の限定性の中に生起する。そうした公的で特殊な限定を受けた精神は、その特殊なパースペクティブに立っており、どのような別様の世界を想像するにしても、せいぜいその世界の一部を、その特殊なパースペクティブから見て主観的な事象を中心とした範囲のうちで想像するだけであり、その事象の背後に蔵された諸連関を細部までくまなく想像することはできないだろう。

6. 様相の諸形相

議論の混乱を食い止めて、潜勢的な可能性を保持した偶然的な現実態の生起という事態を理解するために、ライプニッツ的な可能世界論の見方を対比的に導入してみよう。

『自然法の諸要素』においてライプニッツは様相の諸形相を次の図式にまとめている」とアガンベン『バトルビー——偶然性について』の中で述べて、ライプニッツに由来する次の図式を引用している¹²⁾。



このうち、第四の様相である「偶然的なもの」は、必然的なものと対立していることから、「人間の自由の空間と一致する」が、まさにこの存在することもしないこともできるという「偶然的なもの」においてアポリアが生じるとアガンベンは言う。

もし存在が、存在しないことができるという潜勢力〔引用者注：潜勢態(*potenza; potentia; potential*)〕をいかなるときにも限りなく保持するなら、過去自体が何らかのしかたで撤回されることになるし、可能的なものは何一つとして現勢力〔引用者注：現実態(*atto; energiea; actuality*)〕という状態に移行することも可能的なものに留まっていることもできないことになる。¹³⁾

論理学の伝統では、このアポリアを回避するために、過去の撤回不可能性の原則（あるいは、過去に遡って潜勢態を実現することができないという原則）と、現在するものの必然性の原則（あるいは、現実態(*actuality*)においては存在するものはそのようにしか存在することができないという原則）が導入されたが、問題となるのは後者の原則である。存在するものが現実態においてはそのようにしか存在できないとすれば、もろもろの可能的なものうち現実態に移行しなかったものたちはどうなるのか。スコトゥスの解決は、存在するものは現実態においてはそのようにしか存在できないが、同時に、それがそのようには存在しないことができたという偶然性を潜勢態において保持しているという、条件的必然性の原則を提示することだった。

たとえば私は、昨晚「やっぱり明日は学会に行って発表するしかないな」という決断をしたことの諸帰結の1つとして、今、ここにいる。あの決断の瞬間を今になって取り消そうとしても、それは不可能である。これが過去の撤回不可能性の原則の例証である。過去の決断に由来する現在のあり方に対して別様のあり方を望んでも、過去にさかのぼって決断し直すことはできない。過去は、作用因的な限定をともなった頑固な事実として現在のこの現実態を公的事態のうちに制約しており、いかなる現在もその過去を別様に実現することはできない。

しかし、私はまた、現在するものの条件的必然性の原則にしたがって、今は現実にこの身をここに晒しながらも、ここに来ないこともできたのに、という一抹の後悔と悲哀を私自身の私的事態のうちに夢想的に抱いている。ここに来ないこともできた私という偶然的なものを潜勢態として保持しながら、現実態としてはここにこうして現前していて、他のあり方では存在しえないのである。この例には、決断や意志や作用因と結果の因果的連鎖といった、説明を要する要素が混入しているが、過去における潜勢態から現実態への移行を現在の時点から遡ってやり直すことができないという点と、現在の公的事態のうちに制約された現実態には過去において現実態に移行しなかった潜勢態が、実現しなかった潜勢態という身分のまま私的事態における夢想というかたちで保持されているという点で、スコトゥス的な条件的必然性の議論を例証するものだと言える。

現実態においては、存在するものは別様にはなく、まさにかくかくしかじかのあり方で存在しているという必然性あるいは限定性がある。しかし同時に、この存在者は、別様に存在することもできたという可能性をその潜勢態のうちに保持している。そして、現実態における必然的なものが潜勢態において可能性を保持しているという条件的必然性から、この現実態は、そのように存在しないこともできたという偶然性を帯びるのである。命題が、単なる事実の事柄の言語的な定式化だけでなく、判断や価値づけ、物語的な解釈や哀感や歓喜といった情動的なトーンを帯びた頑固な事実として差し迫ってくるのは、「今、ここ」に成立する事実の必然性と現実性が、偶然性や可能性とのコントラストにおいて感じられるからである。

このように、多が一になる生成のプロセスにおいては、別様に存在することができたという可能性を潜勢的な背景とし、このようには存在しないことができたという偶然性をともなって、しかし、現にこのように存在するという現実態の完成がある。言い換えると、一つの事態の成立、一つの命題的な抱握は、多様な現実態を構成要素とするだけでなく、他の潜在的なまま実現しなかった無数の可能性とのコントラストを背景にしているのである。実現されなかった無数の可能性がどこに保持されているのか、という問いに対して、ライプニッツは、実現されたものたちの現実の世界とは別の、実現されえたものたちの無数の可能的な世界を保持する原初の神という議論を提示した。ライプニッツの可能世界論と充足理由律は、条件的必然性の所在を歴史的現在から歴史以前・創造以前に移動させて、実現しなかった可能性を潜勢的に保持するのが現在の現実態ではなく、あらゆる歴史に先立つ原初的な神だとするものである。世界の多様性は、無数の可能世界というアイデアが示すように、現実態において実現するものの多様性だけでなく、潜勢態において可能であるものの、さらに豊饒な多様性を含む。一方、ホワイトヘッドは、可能世界を夢想しながら最善の世界を選択して創造するライプニッツの神に代えて、実現されなかった諸可能性をこの実現された世界の潜勢的な偶然性として「命題的感じ」のうちに保持する現実的存在を提示する¹⁴⁾。次節では、その議論を追ってみよう。

7. 可能世界の保持の形式としての命題

ホワイトヘッドによれば、歴史の流れは、先行するものによる後続するものの限定について考察することによってある程度合理化しうるが、しかし、なぜ歴史の流れが別様ではなかったのかについて、完全に合理的な説明をすることはできない。「例示されたのがなぜ諸形相のあの流れであって、むしろ別の流れではなかったかについて、歴史に内的な理由をあてがうことはできない。」(PR. 46)

歴史が合理化できないのは、現にそのようにしか存在しえないという必然的な現実態が、別様に

存在することもできたという可能性の無際限ともいえる豊穡さを潜勢態において保持しているからである。このような現実態には、そのように存在しないこともできたという偶然性が伴う。現実世界の頑固な事実が汲み尽くせない多様性を蔵しているように、実現しなかった無数の可能世界の一つ一つが、汲み尽くせない複雑さや多様性を蔵している。条件的必然性が示すのは、このように一つ一つが汲み尽くせない複雑さと多様性を蔵した可能世界が決断の瞬間ごとに無数に分岐しつつ、潜勢的な可能性として現在の現実態のうちに保持されているということである。ある瞬間におけるある主体の直接経験の世界において頑固な事実を構成する諸現実態の全体を一つの濃度をもった無限集合とするなら、この諸現実態の一つ一つが保持する潜勢的な諸々の可能世界は全体としてより濃度の高い無限集合となる。そして、その可能世界のうちの一つにおける可能的事態のうちの一つが、同様の無限集合をその条件的必然性において蔵している。こうした思弁において無限集合は際限なく増えるが、実現した諸現実態からなる頑固な事実としての歴史はそれらの無限集合を条件的必然性において保持しつつ、他の集合ではなくてこの集合として実現している。そして、際限なく濃度を高める可能世界の潜勢的な無限集合に対して、ただこの現実態一つだけが必然的であることについて、このような思弁は合理的な理由を見出せない。

私たちが経験する現実世界は、私たち自身の実存という限定されたパースペクティブから経験され、私たち自身の身体的感官によって選択的に感受された要素が、私たち自身の社会的・歴史的・文化的な文脈や理解の枠組みや常識、あるいは習慣や利害関心や性向や気まぐれによって解釈され、私たちの行為や言語によって表現されているという制約や選択や強調や変形を受けている。それゆえ、「ある事情において直接的判明性をもって輝いている要素は、他の事情では半影(*penumbral shadow*)へと引き下がり、他の契機では暗黒(*black darkness*)に沈んでいる」(PR. 15)。そこで、常識を批判吟味しつつ直接経験の世界の前景に輝いている要素を解釈するために、その周囲に広がって半影から暗黒へとおぼろになっていく縁暈まで、心的な働きを広げていかなければならない。そのような心的な働きのうちには、別様に存在することもできたという無数の可能性も、潜勢的に存在しているだろう。そのような潜勢態を保持することで、私たちは、実現したものがなぜあれであって、別様ではなかったのかを問い求める。というのも、「すべての契機は、解釈の統一性を要求する連帯した世界の流動性のただ中にある現実態であることは明らかである」(PR. 15)からである。

なぜ別様ではなかったのか、についての合理的な説明はいつも不十分だが、それでも現実態は、「解釈の統一性」を要求し、私たちは「なぜ」と問いかける。「直接的なむき出しの事実を理解するためには、それを、それと何らかの体系的な関係をもった一つの世界における一つの事項として、形而上学的に解釈することが必要である」(PR. 14)とホワイトヘッドは言うが、そのような解釈を

求める心的働きには、単なる説明や判断ではない、私的事態に固有の情緒的なトーンがある。この心的な働きは、「今、ここ」に、頑固な諸事実の有無を言わせない現前のただ中に実存する。ホワイトヘッドの言葉を引くと、「ある大きな原理の漠然とした把握でさえも、途方もない情緒的力を身にまといがちである」(AI.235)ということだろう。

このような情緒的トーンをもった心的働きの高まりを、ホワイトヘッドは命題の生起、すなわち「命題的感じ」あるいは「命題的抱握」と呼んだのである。注意したいのは、命題が、混成的な潜勢態だということである。命題は、現実的存在（あるいはその結合体）と純粋な潜勢態である永遠の客体との中間的な性格をもつ「混成的な(hybrid)」潜勢態である(PR.185f.)。命題のこのハイブリッドな性格は、命題が現実的存在（あるいはその結合体）を論理的主語とし、永遠の客体を述語とするという複合的構造を有していることに由来する(PR. 186)。もちろん、「命題」は「言語」によって十全に表現されるという思い込みは否認されなければならないと、ホワイトヘッドが『過程と実在』の冒頭で断っていたことをここで再度思い起こさなければならない。命題は論理的主語と述語の結合として十全に言語的に表現できるわけではない。それなのに、ホワイトヘッドは命題の論理的な構成を現実的存在（あるいはその結合体）から成る主語と永遠の客体から成る術語として記述している。その理由はさまざまに考えられるが、ここで注目したいのは、言語は命題の論理的な主語の位置にくる現実的諸存在（やその結合体）と述語位置にくる永遠の諸客体のもつ「多」を汲み尽くせないという点である。言語は、それが表現しようとする命題を構成する諸要素がもつ複合的な豊饒さや名指しできない微妙な多様さも、それらの構成要素の結合や分離の複雑玄妙な仕方も汲み尽くすことができない。

さらに注目したのは、この無際限な多様性を含む命題の構造のうちに、現実態の多様性や複合性だけでなく、可能性や偶然性の様相をも読み込むことを、ホワイトヘッドはそれと明示しないままに繰り返し行っているという点である。混成的な潜勢態としての命題の機能は、現実世界をいかに必然的に反復するかに関するだけでなく、つまり真か偽かの判断に関するだけでなく、新しさの閃きをもった可能性や偶然性をいかに感じるかにも関する。そして、そこで重要になるのは、その「感じ(feeling)」が、意識という主体的形式によってなされるのではなく、それ以前に情緒的トーンという主体的形式によってなされるという点である。つまり、命題は、様相をともなった潜勢態として情緒的に感じられる。

少々長いが、このことを示すホワイトヘッドの言葉を見てみたい。

たとえばワーテルローの戦いを考えてみよう。この戦闘はナポレオンの敗北に終わり、その敗

北にもとづくわれわれの現実世界のある構造を結果した。しかし、ナポレオンの勝利にともなったかもしれない別の経過を辿る歴史の可能性を表現するような抽象的諸観念は、実際に起こった諸事実と関連がある。〔中略〕今日のわれわれの現実世界においては、ワーテルローの戦いとどの関連によって構成された、永遠の諸客体の半影がある。幾人かは、この半影的複合にもとづく諸要素が効果的な感じになることを認めるし、他の人々はそれらを全面的に排除する。〔中略〕他の人々にとっては、これらの観念は、熟考する決断の意識なしに、白昼夢として彼らの心のうちに揺曳している。また他の人々にとっては、満足感あるいは後悔の、友情あるいは憎悪の情緒的トーンは、これら二者択一の半影によって、その内容を意識的に吟味することなく、それとなく影響をこうむっている。こうした半影の要素は、純粋な概念的抱握ではなく、命題的抱握である。

(PR. 185)

ありえた別様の経過を辿る歴史の可能性を表現するような諸観念による命題を吟味することや、何らかの事態が成立するための諸条件が整った可能世界を表現するような命題の帰結を推察することは、歴史学や経験科学にとって今も中心的な方法である。しかも問題は歴史学や経験科学の方法だけではなく、私たちの経験の全体に及んでいる。実現しなかった可能性をその未実現のままの潜勢態において抱懐し、またある可能性が実現するための条件を実現に向けた潜勢態において抱懐しながら、それらと実現した現実態とのコントラストを感じることは、私たちが私たち自身の活動や状態の経緯や目的や意味を理解する主要な方法である。ホワイトヘッドによれば、直接経験を理解しようとするとき、私たちは現在、過去、未来に導かれるということだが(PR. 14)、その導きの一つが、さまざまな情緒的トーンをもって感じられた「命題」であろう。それは、有りえたかもしれない別様の諸事実という潜勢態を体現する「永遠の諸客体の半影的複合」が効果的な感じとなるような心的な極における働きを引き起こして、有りえたかもしれない現在へ、有りえたかもしれない過去へ、有りえるかもしれない未来へと私たちを導き、それらとのコントラストにおいて、実現された現実態についての理解を深めたり揺るがしたり未来への動機や理想や選択肢を生んだりする。ホワイトヘッドは、この心的な極からの働きを「さまざまなタイプの限定性を伴った別様の諸事実の潜勢態(potentiality)を体現している普遍的なものへと導いていく」働きだとする(PR. 14)。

情緒的トーンをともなって感じられる命題が潜勢的な様相を含むとき、それは、「今、ここ」での新しい合生にとっての諸条件を決断すべき、「『この現実世界』に関する未決定性(an indetermination respecting 'the actual world')」(PR. 284)を示しているとするのがホワイトヘッドの命題論の趣旨だったといえる¹⁵⁾。早い話が、ホワイトヘッドの命題論は、分析哲学と一見同じよ

うな可能世界や反事実的条件法の取り扱いといった主題を持っているが、問題の立て方はむしろ実存論的であり形而上学的である。「この現実世界」に関しての未決定性は、主体的目的に向けていかに生成するかという「直接的決断の余地を残した偶然性」(PR. 284)である。しかし、主体的目的は最初の目的が立てられたところからすでに制約されており、多から一への生成は、多の所与性によって条件づけられている。別様に存在することができるという可能性が潜勢的に伏在しているということを概念的に抱握する心的極の働き（つまり命題的抱握）が、この条件づけられた限定性に対して、生成を決断する「自由の空間」を開く。すなわち、命題的抱握は、現実世界の所与性と最初の目的の定立という条件によって制限された自由において、「この現実世界における特殊な諸事例に関しての『事実において』と『あるかもしれない』との間のコントラスト」(PR. 267)を生む。そして、ホワイトヘッドは、「このコントラストを感じる主体的形式が意識である」(ibid.)と述べている。ここでやっと「意識」という主体的形式が生じるのである。

ホワイトヘッドの命題論は、現実世界とはならなかった無数の可能世界が、純粋な潜勢態（つまり永遠の諸客体）としてでもなく、現実態としてでもない、いわば宙吊りのような状態で現実世界と純粋な潜勢態とのあわいに生成することを示唆している。命題が「混成的」な潜勢態であり、それを感じる主体的形式が意識だとホワイトヘッドは言っているが、これは、私たちの経験を一連のプロセスとして分析した際に、かなり後期の段階（ホワイトヘッドはある箇所これを合生プロセスの「補完相」を二つに区分した「下部相」のうちの二番目の相と呼んでいる(PR.213-214)）において、所与の現実世界と実現しなかったものたちの可能世界とが混成的に重ねられていく相が見出されるということである。言い換えると、私たちが知性的に意識する世界は、むき出しの所与としての現実世界そのままではなく、所与の現実世界とそれとは両立不可能であるような諸々の可能世界との重ね合わせにおいて見られた混成的な生成物である。頑固な事実として現前する現実世界と、実現しない／実現しなかった無数の可能性との間のコントラストを強烈な情緒のうちに感じる意識において、現実世界の所与性による限定の中で実現しうる諸々の可能性が抱懐されるのであり、その中から来るべき現実態において実現すべき可能性を選択する決断が「最初の目的」に基づいてなされ、新しいものへの生成が決断される。諸々の可能性を抱懐しそのうちの一つを決断することのうちに、想像力の自由な飛翔があり、あるべき理想の追求と実現への努力がある。所与の現実世界と抱懐された諸可能性とのコントラストが強烈でほとんど両立不可能に思えるほどであれば、私たちは現実の世界と希求する理想とのあいだで引き裂かれて激しい情動的な経験をするとし、現実世界の所与性に対する可能性の重ね合わせが希薄になればなるほど、経験から情緒をともなった知性的意識という性格が希薄になっていき、所与のもの単なる常識的な反復的再生という性格が強まる。

しかしプロセスの「盲目性」は、そのかぎりでは未決定性を保持している。そこになればならないのは、知性でもって「見ること(sight)」の決定的否定か、それとも知性でもって「見ること」の承認である。知性でもって見ることの否定とは、純粋な潜勢態という抽象的地位にある永遠の客体を無関連へと追放することである。「有るかもしれないもの」は「有るところのもの」と関連あるコントラストをもちうる。もしこうした抽象的機能をもつ純粋な潜勢態が関連をもつことから追放されるならば、二番目の下部・相は瑣末なものとなる。そのとき、プロセスは盲目的な、つまり、知性の働きが何ひとつそこに関与していないという意味で盲目的な、現実的契機を構成する。こうして「ヴィジョン」というかたちでは常に心的活動はあるが、意識的な「知力」というかたちでは、常に心的活動があるわけではない。〔中略〕その純粋な潜勢態に関して実現された永遠の客体は、決定された論理的主語と関係するものとして、当の現実的契機の心的活動における「命題的な感じ」と呼ばれる。現実的契機に属する意識は、知性的補完の下部・相である。もっともそれはこの下部・相が、本当に瑣末ではない場合であるが。この下部・相は、単なる命題的潜勢態と実現された事実とのあいだの、十全なコントラストを感じへと誘発する。

(PR.214)

別様に有り得たかもしれないという可能性が、現にかくかくしかじかのあり方で存在するところのものとは何らかのコントラストをもっていて、実現された可能性と実現されないまま潜勢態のうちに保持されている可能性とが何らかの仕方に関連づけられているということが、「知性」ないしは「意識」の本質だとホワイトヘッドは言う。現実態と純粋な潜勢態を重ね合わせつつ両者のはざまで揺れることが知性的存在者の想像力の働きであり、この揺籃によって「自由の空間」が開かれる。そのような心的活動のうちに、頑固な事実と直面しつつ飛躍する想像力の働きがあり、後悔や羨望や僥倖の念のうちで沸き起こる悲哀や存在への驚きや使命感がある。「命題」という名称よりもむしろ「理論(theory)」という名称の方がいいと述べたホワイトヘッドの示唆にしたがえば、現実態に潜勢態を重ね合わせる心的活動としての「命題的な感じ」という考えは、アリストテレス以来の「観想(theoria)」の形而上学とジェイムズやブラッドリーの情緒的・身体的な「感じ」の形而上学とを結合させる試みだといえる。「理論」ないしは「観想」としての「命題」は、永遠の客体という純粋な潜勢態を観想する心的な活動が介入することによって、現実世界が、有無をいわず現在を限定する単なる頑固な諸事実の塊としてではなく、様々な可能性を蔵した創造的な世界として現前するのである。

8. 情緒から問いへ、希求へ、決断を促す選択肢へ、文明化を導く理想へ

「命題というのは、現実態に関する観念であり、事物についての示唆であり仮定である。それを経験のうちに抱懐することは、多くの目的に役立つ」(AI. 244)とホワイトヘッドは言う。しかし、それは、何の目的に役立つのか。

まず、ホワイトヘッドが例示しているように¹⁶⁾、命題的抱握は、現実世界の多様性を、単に現実態において実現され定着した多なる現実的存在とその結合体だけでなく、実現しえたかもしれない可能性にまで拡大する。しかし、このように半影的な広がりをもったものとしての現実世界は、一方でカエサルがルビコン河畔でおとなしく武装解除し、他方で「賽は投げられた」とばかりにそのままローマに進軍するようなことが共に現実態として実現して歴史を両立不可能な諸事態の並存で満たすような「何でもあり」の世界ではない。命題の成立とは、生成を制約する所与性としての多なる世界の頑固な事実に対して、いわば別の選択肢の可能性を幾重にも重ねながら受け止めるような主体の生成である。そこには、情緒的トーンがとれない、しばしばそれは強烈な情緒にまで高まり、「驚愕、安堵、何のため」の感じとなる(PR. 188)。そして、命題的抱握は、事態はなぜ別様ではなかったのかという問いにもなる。現実世界の、潜勢態まで含めると無際限の可能性がある中で、なぜ、事態はこのようでなければならなかったのか、という問いは、しばしば強烈な情緒的トーンをともなった意識的経験において生起する（なぜこの発表から逃げ出さなかったのかと自問する私のように！）。

命題的抱握はまた、優れて実存論的な心的働きの高まりをも意味する。必然性と偶然性、あるいは可能性と不可能性をめぐって現実態と潜勢態を問う問いは、可能世界論や様相論理学においてばかりでなく、実存哲学的な思索においても、問われてきた。キルケゴールは、『あれかこれか』の中で次のように問いかけている。

私たちが別れる前に、私の聴聞者よ、なおひとつの質問をしたい。事情が別様であったら、あなたは望むことができるだろうか。望むことができるだろうか。〔中略〕私はただ、あなたは別様であることを望むのか、とだけ問うのだ。〔中略〕いや、もっと真剣に、あなた自身に問うがいい。なぜならここには、真に生と至福がかかっているのだから。¹⁷⁾

事物が別様であること、自分自身が別様であることを望むか、という問いは、キルケゴールだけでなく、パスカルにおいても、神学的あるいは弁神論的な問いとして執拗に問われる。

「私は、誰がいったい私をこの世に置いたのか、この世が何であるか、私自身が何であるかを知らない。私は、すべてのことについて、恐ろしい無知のなかにいる。私は、私の身体、私の感覚、私の魂、そして私のうちのまさにこの部分、すなわち私のいま言っていることを考え、すべてのことと自分自身とについて反省し、しかも他のものについてと同様に自分自身をも知らないこの部分、これらのものが何であるかを知らない。私は、私を閉じこめている宇宙の恐ろしい空間を見る。そして自分がこの広大な広がりの中の隅につながれているのを見るが、なぜほかのところではなく、このところに置かれているのか、また私が生きるべく与えられたこのわずかな時が、なぜ私よりも前にあった永遠のすべてと私よりも後にくる永遠のすべてのなかの他の点ではなく、この点に割り当てられたのであるかということを知らない。私はあらゆる方向に無限しか見ない。それらの無限は、私を一つの原子か、一瞬たてば再び帰ることのない影のように閉じこめているのである。私の知っていることのすべては、私がやがて死ななければならないということであり、しかもこのどうしても避けることのできない死こそ、私の最も知らないことなのだ。

私は、私がどこから来たのか知らないと同様に、どこへ行くのかも知らない。ただ私の知っていることは、この世を出たとたん、虚無のなかか、怒れる神の手中に、未来永劫陥るということ、この二つの状態のうち、はたしてそのいずれを永遠に受けなければならないのかということも知らないのだ。これが私の現状である。弱さと不確実さとに満ち満ちている。……」¹⁸⁾

私の一生の短い期間が、その前と後につづく永遠のうちに〈一日で過ぎて行く客〉のように呑み込まれ、私の占めている小さい空間、否、むしろ私に見えるかぎりですら小さいこの空間が、私が知りもせず私を知りもしない無限の空間のうちに沈んでいるのを考えるとき、私は自分があそこではなくここにいるということに、恐れと驚きを感じる。なぜなら、あそこでなくてここ、あの時でなくて現在の時に、なぜいなくてはならないのか、その理由は全くないからである。誰が私をこの点に置いたのだろう。誰の命令と誰の処置とによって、この所とこの時とが私にあてがわれたのだろう。¹⁹⁾

注目したいのは、なぜこの現実なのか、なぜ別様ではなかったのかを問う彼らの、その問いかけの執拗さである。それは単に、実現しなかった可能性があったということを示しているのではない。この問いが問うていることのうちには、「真に生と至福がかかっている」(キルケゴール) ような何かがある。そこでは、問う者自身の存在が問われている。自らの存在が必然

的でも確実でもないということが問われている。存在の偶然性が執拗に問われるのは、このような「真に生と至福がかかっている」ような状況においてである。

時代的にはパスカルとキルケゴールのあいだに位置するライブニッツは、現実がなぜ別様ではなかったのかというまさにこの問いに対して、実存論的な洞察によってではなく、充足理由律と結びついた可能世界論あるいは最善世界説と呼ばれる思索による壮大な形而上学を答えとして展開した。

自然学者としてではなく、形而上学者として論じると、一般にはあまり用いられていない大原理を使うことになる。それは「何ごとにも十分な理由なしには起こらない」、言い換えると「どんなことでもそれが起こったなら、十分ものを知っている人にはなぜそれがこうなっていて別様ではないのかを決定するための十分な理由を示すことが必ずできる」という原理である。この原理を認めた上で、当然提出される第一の問いは「なぜ無ではなく、何ものかがあるのか」というものである。実際、何もなかった方が、何かあるよりも簡単で容易だといえる。次に、事物が存在しなければならぬということを認めた上で、「なぜ事物はこういうふう実在しなければならぬのか、別様であってはいけないのか」という理由を示すことができなければならない。²⁰⁾

現実がまさにこのような現実であって別様ではなかったのには十分な理由があるとライブニッツは言うが、「もっともこのような理由は、ほとんどの場合われわれには知ることはできないけれども」²¹⁾という但し書きも付けている。パスカルやキルケゴールが執拗に問うたのは、まさにこの但し書きの部分だろう。われわれ自身を含むこの現実の世界が別様でなかった十分な理由を知ること、そしてこの現実が最善である十分な理由を知ることには「真に生と至福がかかっている」のだが、しかし、われわれはそれをほとんど知ることができないという「恐ろしい無知」(パスカル)の中にいる。

多が一となり、一つ増し加えられるという世界の多様性は、現実世界に実現した現実態の多様性だけでなく、この現実態とのコントラストにおいて命題的に抱握された諸可能性の潜勢態がもつ無際限の多様性でもある。主体的目的へ向けての生成が新しさの創造であるのは、そのような多様性をもった命題を感じる心的な働きの自由による。

そして、この自由な心的極の働きは、文明化する社会にも働く。現実世界における頑固な事実としては実現しなかった様々な可能性を混成的な潜勢態として抱懐する経験の中から、現実世界に実現されるべきものについての命題的抱握が生起することがあるかもしれない。命題を抱懐するとは、このとき、直接経験を地盤にして、そこから想像的に飛躍していくことなのだ。

文明社会において、現実世界の多様性を越えた命題の多様性は、論理的な可能世界の多様性を示すだけでなく、生命の世界の躍動と悲哀をも示しうる。言葉のうちに、生命の躍動が宿り、様々な可能性を背後に秘めつつ具体的な言語的表現を得た理念が社会の文明化を嚮導する。命題の無際限な多様性のうちには、現実世界に実現したり定着したりしていないが、「希求から由来し希求に帰趨する、分節化された信念」(AI. 6)として生成するものがある。汝の敵をも愛しなさいという福音書の^{ことば}言について、ホワイトヘッドはこう言っている。

初期の形態においては、キリスト教はすさまじい熱狂と実行不可能な道徳的理想をもった宗教であった。〔中略〕これらの理想は比肩するもののない改革のプログラムであり、西洋文明の進歩の一要素となってきた。人間性の進歩は、この根源的なキリスト教の理想を、個人としての成員にとってますます実行可能なものにしていくように社会を変革していくプロセスとして定義することができる。社会構成が現在のままであれば、福音書の至る所に見出される道徳的戒律を額面どおり固執すれば、急激な死を招くことになるだろう。(AI. 16)

「実行不可能な道徳的理想」は、それが実現されたかもしれない可能世界を描き出すだけではない。それは、文明の進歩を促す理想として分節化され、言葉となってこの現実世界の心的活動のうちで可能性として抱懐され、そのようにして世代を超えて継承される形式を得た希求は、その実現を目指す熱狂や地道な努力によって緩慢に実現されていくだろう。

おわりに——「一」なる実存における「多」の世界

命題は、単なる常識の枠内での反復的再生としてだけでなく、強烈な情緒を帯びて感じられることがある。そこに、実存論的な問いが生じる。なぜ事態はこのようであって別様ではなかったのか、といった問いである。命題は、たとえばそのような問いとして感じられることがある。そのうちのいくつかは、有りえたかもしれない世界の夢想として、多様な世界の経験のうちに浮かんで消えていくだろう。いくつかは常識が示すような当たり前の世界の頑固な事実という見え方と、憧憬や後悔や理想などの強烈な情緒をともなった別様の世界とのコントラストにおいてこの現実世界をさまざまに価値づけるだろう。さらに、こうした活動性のうちのいくつかは、積極的だが「今、ここ」では実現不可能な目的を含んだ希求となる。さらにそのうちのいくつかは、実現へと向けて決断を促す選択肢として迫ってくるかもしれない。あるいは、不可避的に限定された事実として与えられた檻のような現実態からの解放をめざす衝動や希求として、強烈な情動的トーンをもって解釈され

る現実を変革する力や説得的要因を生むかもしれない。そして、そのいくつかは、文明社会を嚮導してゆっくりとその実現を用意するような、当該社会においては実行不可能な理想として抱懐され継承されていくかもしれない。

この命題的抱握が含意する潜勢態の際限のない豊饒さと現実世界の限定された多様性とのコントラストから、心的働きにおいて高まる強度が引き出されてくる。だからこそ、美的経験から宗教的経験、文学から思索、社会的理想の追求まで、人間的な社会の諸経験のうちには、生成し消滅する現実世界の不可避的な推移を超え出ていく、超時間的な性格がある。そして、それこそが、思考のアクチュアリティ（現実態）なのだろう。

実現したものの多様性から、潜勢的なもののさらなる多様性へと想像的に飛躍すること。そして、潜勢的なものどもの無限の多様性を、できるかぎり十全に、整合的に、より包括的に、理性的な構図によって汲み取ること。この想像的飛躍のうちで、「一つの今、一つのここ(a *here and a now*)」(SMW. 69)としての現実の存在の意味が立体化されて見えてくるのだし、同時的世界の見えなかった諸側面が開けていくのだし、それらが相働いて開けていく未来もおぼろに見えてくる。今、ここでの一つの実存のうちに多なる世界が見えてくるのだ。それはまた、多なる実存のあいだの交通や交渉として現実の世界を感じ、理解することでもある。実現していないものの潜勢態へと創造的に飛躍し、その多様性を構図化する思考の試みが成功する度合いに応じて、現在を見通すことも過去を受け取ることも未来を予期することもより深くより広くより立体的に、そしてより困難になっていく。

世界の多様性は、重層的である。そして、純粹な潜勢態でもなく、歴史的な世界における頑固な事実としての現実態でもなく、それらの混成として両者の中間のようなどころでいわば宙吊りになっているそのつどの可能世界としての「命題」にこそ、些末なものから恐るべきものまで多種多様なものたちの「何でもあり」が蔵されている。この雑多な多を、コントラストにおいて一を浮かびあがらせるような両立可能な調和へと転じていくことが、そのつどの「多が一になり、一つ増し加えられる」という創造的前進の営みなのだろう。

注

- 1) 本稿は、平成27年6月に立正大学で開催されたアメリカ哲学フォーラム第2回大会の開催校特別企画パネル「ホワイトヘッド哲学の現在—多元的世界と生成／創造の哲学」での提題を加筆修正したものである。
- 2) ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead)の著作は、引用に際して以下のように略記し、該当するページ数を付記する。

SMW: *Science and the Modern World*. 1925. New York: Free Press, 1967.

PR: *Process and Reality*. 1929. Corrected Edition. New York: Free Press, 1978.

AE: *The Aims of Education and Other Essays*. 1929. New York: Free Press, 1967.

AI: *Adventures of Ideas*. 1933. New York: Free Press, 1967.

ESP: *Essays in Science and Philosophy*. 1947. New York: Greenwood Press, 1968.

- 3) ベルクソン『創造的進化』「序論」。H. L. Bergson, *L'évolution Créatrice*, 1941, Quadrige/PUF, 2009, vi.
- 4) これに続く議論は、次のようなホワイトヘッドの言葉を踏まえている。「〔前略〕各出来事は、その分離された個性において見られると、2つの理念的終着点の間の推移である、すなわち、理念的に分離された多様性にある各出来事の構成諸要素は、具体的共存性における各出来事の同一の構成諸要素のうちへと移行していく。このプロセスに関して、2つの流通している学説がある。1つは、この最終的共存性を無から引き出す外的（創造者）の学説である。もう1つの学説は、〈宇宙〉においては、この推移の諸事例とこれらの事例の構成諸要素以外には何もないことが、諸事物の自然本性に属する形而上学的原理だとする学説である。この後者の学説が採択されるとしよう。そのとき〈創造者〉という語が表現するのは、各出来事は新しさへと結果するプロセスなのだ、という観念である。また、〈内在的創造性〉とか〈自己創造性〉といった言い回しにおいて慎重に使用されるなら、この創造性という語は、超越的（創造者）の含蓄を回避することになる。しかし単なる〈創造性〉という語は〈創造者〉を暗示するので、この学説全体が、何やら逆説や汎神論めいた体裁を帯びることになる。それでもなお、この学説は、新さが生まれることを伝えてはいるが。」(AI. 236)
- 5) ホワイトヘッドの〈神〉と偶然性の問題について、次の論考は必要な議論をコンパクトにまとめており、大いに示唆的である。荒川善廣「プロセスと偶然性——ホワイトヘッドと九鬼周造」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第10号、2002年、49-63。
- 6) これと同様の問題意識は、シカゴ学派の社会学者にしてプラグマティズムの哲学者として知られるジョージ・ハーバート・ミードにも見られる。ミードは、初期の書評で、「個人は宇宙の本質的表現である」と言っているのだが、これと同じことが、ホワイトヘッドにおいてより深く広く考察されていることに、後になって気づく。初期のミードは、ヘーゲルの弁証法に飽き足らず、「ヘーゲルにとって、存在はプロセスのなかの諸契機のひとつであるとともに、啓示されるべき全内容である」が、このような「存在」、すなわち「固定された内容または実体は、特殊と普遍の問題をけっして解決できない」と述べている。
- 初期から中期にかけてのミードの思索は、固定的で実体的な「存在」の思索から「プロセス」の思索へと向かう活路を見出そうとした悪戦苦闘のドキュメントである。ミードの思索の道は、残念なことにその途上で断たれたが、そこには、「多と一」という形而上学的存在論の中心論題をはじめ、「全体と個」、「普遍と特殊」、「創造性と調和的秩序」といったコントラストに対する深い問題意識が明確である。そして、ミードは、後期の思索のなかで、ホワイトヘッド哲学に出会い、これらのコントラストをなす形而上学的な諸問題の解決の道を、有機体の哲学のうちに見出していく。この間のミード哲学の展開は、加藤一己氏の篤実な研究と翻訳によって日本にも知られるようになった。加藤一己「G.H.ミードの思想形成過程」、『初期シカゴ学派の世界』恒星社厚生閣、2004年所収。G.H.ミード『G.H.ミード——プラグマティズムの展開』加藤一己・宝月誠編訳、ミネルヴァ書房、2004年。
- 7) 「多を表現する一」としての個別的な存在という言葉は、ライプニッツのいわゆるモノドロロジーとホワイトヘ

ッドの有機体の哲学に共通する形而上学的立場を示している。ホワイトヘッドによるライブニッツ哲学の継承と批判については、次の拙稿を参照。村田康常「ホワイトヘッドとライブニッツ——アクチュアル・エンティティとモノイド」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第16号、2014年、99-114ページ。

- 8) 有機体の哲学における探究の出立点は、直接経験の事実である。「直接経験の解明は、どんな思想をも正当化する唯一のものであり、また思想の出立点は、この経験の構成要素の分析的観察である。」(PR. 4)このような有機体の哲学の経験論的性格をホワイトヘッドは、有機体の哲学の「経験的側面」(PR. 3)と呼び、その意図はすべての経験に適用可能な十全な解釈の図式を構築することだとして、整合的な論理体系を意図するという「合理的側面」(PR. 3)とともに有機体の哲学を動機づける原点としている。次の拙論を参照。村田康常「有りえないものの実在——ホワイトヘッドにおける逆説の論理」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編、『プロセス思想』第12号、2006年、65-86ページ。
- 9) この「ざわめく(buzzing)」という語にホワイトヘッドは特に注をつけて、「この形容語句は、もちろん、ウィリアム・ジェームズから引用されている」と注釈している。ジェームズのよく知られた語は、“one great blooming, buzzing confusion” という表現で、『心理学原理』に見られる。William James, *The Principles of Psychology*, I, 1890, The Works of William James, ed. by Frederick Burkhardt, Harvard University Press, 1981, p. 462.
- 10) 佐藤陽祐は、ホワイトヘッドの知覚論の中で命題論がもつ必然性と重要性を指摘して、知覚論・生成論の広い文脈の中に命題の生成を置き、「命題にもとづく知覚論」の解明に取り組んでいる。佐藤陽祐「ホワイトヘッド哲学における命題論—「理論負荷性」にもとづく命題概念の理解と命題にもとづく知覚論の考察」日本哲学会編『哲学』No.66、2015年、160-173ページ。佐藤陽祐「ホワイトヘッド哲学における知覚論——命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けとの関係について」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第16号、2014年、153-165ページ。また、同様に、ホワイトヘッドの命題を単なる言語的措定物としてではなく、意識の生成プロセスにおける不可欠な相として論じ、「変換(transmutation)」が命題にとって本質的であることを示した齋藤暢人の論考は示唆に富む。齋藤暢人「ホワイトヘッドの命題論」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第10号、2002年、112-123ページ。
- 11) ホワイトヘッドの命題論を自由に読み解くことが許されるという根拠は、「命題」が、「言語的措定としてのそれよりもはるかに含みの多い概念」(齋藤暢人、前掲論文、112)だからである。その理由を3点挙げてみる(PR. 184-185)。第1に、「命題」は、心的な極の内的強度の成長につれて「欲求」、つまり「概念的抱握」がとるようになる形態だとされる。つまり、ホワイトヘッドにおいて「命題」は、心の働きのうちで「欲求」が高まり新しさが閃くような「心的な働き」の『突発性』によって示される。第2に、「命題(propositions)」は、「理論(theories)」と呼ぶ方がふさわしいことをホワイトヘッドは認めて、その機能は、所与の現実世界に成立する事態の論理的な描写ばかりでなく、むしろ「感じのための誘因」として、現実世界における自己実現の享受と目的の直接性を提供することだとしている。「理論」という語が形而上学的伝統における「観想(theoria)」をも含意すると理解すれば、ホワイトヘッドの「命題論」は「観想論」と捉えることができる。第3に、ホワイトヘッドは、「強烈な宗教感情、たとえばキリスト教徒が福音書の言^{ことば}を黙想するさま」を例に挙げて、命題の機能は「判断」だけでなく「価値の実現」であり、そこには意識という主体的形式より以前に、情動的トーンという主体的形式があると述べている。

-
- 12) ジョルジュ・アガンベン『パートルビー——偶然性について』高桑和巳訳、月曜社、2005年、58ページ。
この図式は、ライプニッツ『自然法の諸要素』の六次まで現存する草稿のうちの第五・第六草稿に由来するものと思われる。『ライプニッツ著作集 第II期 神学・法学・歴史学——共通善を求めて』（酒井潔、佐々木能章監修、工作舎、2016年、51-86ページ）所収の「自然法の諸要素」（川添美央子訳）、特に訳者解説の86ページを参照。
- 13) アガンベン、前掲書、59ページ。〔 〕および傍点は引用者。
- 14) ホワイトヘッドは、ライプニッツの可能世界論、特にそれが最善世界説を擁護することに対して批判的で、次のような辛辣な見解を示している。「ライプニッツの『最善の可能世界』の理論は、当時のまたそれ以前の神学者たちによって組み立てられた、創造者の体面を救うために拵えられた向こう見ずなたわごとである。」
(PR. 47)
- 15) 傍点は原典でイタリック。引用部分の関連を示すために、前後をすべて引用しておく。『『決断された』諸条件は、決して自由を放逐するようなものではないことが注意されるべきである。それらは自由を制限するにすぎない。常に、直接的決断の余地を残した偶然性がある。こうした考察は、直接的に新しい合生にとっての諸条件を決断すべき『この現実世界』に関しての未決定性によって例証される。その決定に関してもろもろの選択肢があり、それらは直接的決断のために保留される。いくつかの現実的諸存在は、定着した過去のうちにあるか、同時的結合体のうちにあるか、それとも直接的決断にしたがって、まだ決断されていない未来に残されるかである。』(PR. 284)
- 16) 命題的抱握の例としてホワイトヘッドは次のようなものを挙げている。『ハムレット』を読む人。福音書の言を瞑想するキリスト教徒。ワーテルローの戦いでナポレオンが勝利したという仮定上の選択肢を沈黙考する歴史家。同じくナポレオンが勝利したことを白昼夢として心に揺曳する人。同じくナポレオンが勝利したという選択肢を満足感あるいは後悔、友情あるいは憎悪の情緒的トーンをもって思いめぐらす人。就寝時にその日のさまざまな出来事を無意識的に回顧している人。(PR. 185-187)
- 17) キルケゴール『あれかこれか』第二部最終章「われわれは神に対していつも正しくないという思想の内にある、教化的なもの」最終節：SV. 3, p.324
- 18) パスカル『パンセ』B.194, L.427
- 19) パスカル『パンセ』B.205, L.68
- 20) ライプニッツ『理性に基づく自然と恩寵の原理』7
- 21) ライプニッツ『モナドロジー』32

要旨

Whitehead's Proposition Theory and Pluralistic Cosmology:
Actuality and Possibility of the World That Is both "One" and "Many"

Yasuto MURATA*2

本論文の目的は、西洋形而上学の伝統のなかで絶えず論争の的となってきた一元論と多元論の葛藤、つまり世界を一と見るか多とみるかという立場の相克に対して、現代形而上学のひとつの典型といえるホワイトヘッドの思弁的な宇宙論がどのような立場をとっているかを検討し、世界を一と見る立場も包摂した彼の多元的な宇宙論の特徴を明らかにすることである。現実世界を新しさへの創造的前進のプロセスと見るホワイトヘッドの形而上学的宇宙論では、創造的な世界における偶然性や可能性が重要な主題となる。本論文では、ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論体系において究極的なものの範疇とされる「多」と「一」と「創造性」をめぐる思弁を辿って、偶然性や自由と必然、可能性と現実態などの諸様相によって描き出される多元的宇宙のあり方を描き出すことを試みた。彼の形而上学的宇宙論では、現実世界の多様性に可能世界の多様性が重ねられて、「多が一と成り、その一が多に増し加えられる」という創造的世界の創造的なダイナミズムが考察されている。本論文では、このような可能世界論と多元的宇宙論の交錯するホワイトヘッドの形而上学的宇宙論の特徴を、彼の「命題」あるいは「理論／観想」に関する思弁的な考察の読解を通して検討し、多元的宇宙がそのつど新しく生成する一なる存在のうちに包摂されつつ、その一が多なる世界を構成する一要素となるという「多」と「一」の創造的なダイナミズムの中で、実現されなかった可能世界の多様性もまた実現された一なる要素とその多なる現実世界の中に様態的に包摂されていることを示した。

キーワード; ホワイトヘッド 可能世界 多元的宇宙 命題 理論／観想

*2 Nagoya Ryujo Women's University